2010（平成22）
漢詩神奈川
第８号

神奈川県漢詩連盟
横浜市旭区中沢
３－３９－９
電話045-361-2033
FAX045-361-2033
発行人 中山　清
編集人 田原 健一

花に酔い、詩に酔い：

平成２２年度総会　盛大に開かる

副会長　岡崎　満義

5月の「港の見える丘公園」はまことに美しい。遠くに見える青い海と白いベイブリッジ、足許には花がいっぱい。赤や黄のバラがそこかしこに咲き乱れている。そこに建つ神奈川近代文学館大ホールで5月14日午後一時から平成22年度神奈川県漢詩連盟の総会が開かれた。会員64名が参加、中山会長の挨拶のあと、21年度活動報告、会計報告、22年度活動方針、予算案など、議事はスムーズに進んだ。

そしてお目当ての石川忠久・全漢詩連会長の講演「花を詠う詩」が始まった。実は来年4月1日に発行予定の「扶桑風韻」第8号の課題は「花」である。会員の投稿の為に少しでも参考になるならば、と用意された特別講演である。

杜牧の「清明」に詠われた「牧童遙指杏花村」のあんずの花から始まって、梨、牡丹、つつじ、薔薇、からたち、蕎麦：など12の花についての詩、楽しく含蓄のある作品を紹介していただいた。皆うっとりと聞き惚れた。（講演の詳細は、6頁～8頁を参照されたし）

陶然とした気分の覚めないまま、会場を隣りのポートヒル横浜に移して、賑やかな懇親会が開かれた。詩吟、中国語による朗誦も披露され、おいしい料理と酒もほどよく回って、会場は大いに盛り上がった。

宴たけなわ、いつものように、石川忠久会長がテーブルの紙ナプキンに毛筆で、サラサラと今日の総会偶成を一首。

節入夏初新緑加
相州詩会勢愈誇
庭前紅白真成色
紙上添得十二花

この詩を見て窪寺啓・全漢連常務理事がこれまた紙ナプキンにサラリと一首、次韻の妙。

敬次岳堂先生原玉
今朝迎夏暑纔加
金港騒人盟更誇
丘上薔薇妍麗盛
話中十二和斯花

この二首の七絶を、いつものように住田笛雄監事が自慢の喉で、朗々と吟じた。

世の中のデジタル化はますます加速しているが、こういうアナログ的な優雅な風情が今も残っていることは、大いに誇っていいことだろう。「情報」はデジタルのIT機器からキャッチ出来るだろうが、「風情」はそこから掴み取ることはできないだろう。「風情」を伴わない「情報」は単なる「報」ではないのか。二人の先生の詩を聴きながら、私はそんな妄想にしばし浸った。

興に乗って私も思わず民謡「刈干切歌」を歌ってしまった。

臨海高楼吟興多
五年鴎盟夢中過
酔花酔酒酔詩日
欲唱田夫一曲歌

終

◆小田原吟行会　報告

三上　光敏

平成22年3月30日、小田原への吟行会が催行された。参加人員は42名。こ1時間かかる遠い場所での吟行会としては、まずまずの人数だ。気になっていた空は快晴、幸先よし。ただ気温は1度Cで少し寒い。対策の為ウインドブレーカーを持参する。小田原駅の改札口前で10時半まで中山会長と一緒にプラカードを持って案内する。石川忠久顧問ご夫妻、窪寺啓顧問にも遠路はるばるお出まし頂いた。

最初は駅前路地にある北条氏政氏照の墓所。墓はゴミゴミとした路衢のなかにあって、後世の人間の身勝手さを見せつけられる。ついでガイドについて街中を1キロほど歩き、土塁跡や鐘楼などを見学、やっと本命の小田原城へ入る。お堀端の櫻は淡いピンクの八分咲き、碧の水に紅い橋、情景を頭の隅の詩嚢にいれる。歴史見聞館を見て小田原城天守閣の前に立つ。青空に聳え立つ白壁と黒い甍、これまた表現出来るかどうか頭に焼き付ける。天守閣からの山海の眺め、爽快！。

昼食はだるま料理店本店、旧館2階大広間での懇親の場である。恒例の柏梁体、皆さん提出した中から石川先生が十句秀作を選ばれて発表，悲喜こもごもの喚声のなか、色々な会員の方の闊達なスピーチが続く。（皆さんの柏梁体の句は中山会長が散々苦労されて“聯句”とされた。次頁をご参照。）

また、石川窪寺両先生の即興の詩が披露された。ただただ、感嘆するのみ。

小田原吟行　岳堂散人

相州要衝地
遠訪此登臨
椅杖望蒼海
向風對碧岑
堤花花未半
濠水水猶深
遊覧逍遥後
柏梁任意吟

同　貫道

田城重訪遍春陽
妍麗櫻花放異香
白壁玄甍摩碧落
三層楼影引奚嚢

これも恒例、住田監事のこの詩の即席朗詠、最後には岡崎副会長の貝殻節、と司会の桜庭氏の当意即妙な進行ぶりに感心しながらの至福の一時があっという間に過ぎる。名残りを残しながら4時近くでお開きになった。

振り返れば、お天気や満開の桜にも歓迎されて大満足大成功の吟行会であった。また、神奈川漢詩連盟の中には、多士済々色々な会員の方がおいでなのだなあと言う認識を新たにした。

企画実行された櫻庭さん水城さん等役員の方々に改めて感謝したい。

終

◆吟行会の歩み

今迄に県連として実施してきた吟行会を振りかえって見ます。

第1回　**金沢文庫・称名寺**(平成19年4月3日)小雨　32名参加。金沢文庫で展示中の【弁才天展】を見、お隣りの称名寺の庭を散策。古いお寺の佇まい、雨に煙る新緑が印象的でした。

第2回　**紅葉の円覚寺**（平成19年12月4日）快晴　44名参加。境内は紅葉の楓黄葉の銀杏が最盛り、歴史を秘めた禅寺は華やかでした。

第3回　**鎌倉大仏・長谷寺**(平成20年12月6日)快晴　42名参加。大仏の温顔、長谷観音の慈眼に接し、俗塵を払ったような気持ちでした。

第4回　**小田原城**　横浜から遠い場所でしたが、従来同様、晴天42名の参加人員でした。

第5回めの吟行会は、今年11月29日**城ケ島・三崎港**です。奮ってご参加されますようお願い致します。

◆小田原城・柏梁体聯句

中山　清

嬉しい事に参加者多数で、陽韻のグループと先韻のグループに分けて詠じて頂きましたが、どういうわけか先韻の方が人数が少なくなりました。皆様がたの句をなるべく興あるように並べ替える作業の中で、字を選んだ私の方に反省すべき点が今回もありました。吟行の季節、場所などから難しい字になってしまうこともあるのだという事です。

全体の構成をスムーズにする為、二三の方には少し改変をさせて頂きました。ご寛容をお願いいたします。また、不才の両方の韻での参入も宥恕下さいますようお願いいたします。

其一『陽韻』聯句

水仙花開處士荘　篪軒　住田　笛雄
白梅花影倚幽香　榮翠　小林　栄一
不時朔風人不防　中西エツヨ
気候不順入新陽　宇都宮義久
東道仰天暗断腸　葦舟　中山　清
花期卜得訪西湘　内村　才五
碧落快晴成軽装　小館　裕彦
相州古城方春芳　梅塘　関谷　則
春暉燦燦水湯湯　花田　裕
列樹帯苔百年相　小山田豊美
櫻花鮮明天碧蒼　蕗紅　石川　晏子
花下歓聲度池塘　生駒　裕子
鴎鷺賦詩模大唐　貫道　窪寺　啓
勁松矗矗示永昌　飯沼　一之
復元城門無刀創　森本　英之
層層天守傳栄光　水荘　古田　光子
共上石磴相扶将　岳堂　石川　忠久
天守絶頂看四方　石田　健司
相海眼前望洋々　中野　国武
碧漣春光無盡蔵　岡崎　満義
丹嶺玲瓏表瑞祥　宇津井　寛
昔蹤詩趣共無量　燧翁　玉井　幸久
天正包囲松不忘　小松日出夫
攻城百萬傲覇王　圓谷　照男
借問城中足兵糧　泰山　岡田　泰男
往時茫茫恨難商　三橋　稟也
撫古悵然涙数行　酒井謙太郎
似笈負薪金次郎　城田　六郎
負薪読書不亡羊　相原　一輝
積小為大説大綱　岡崎　勝郎
城跡回遊轉倉皇　三村　公二
過午後餐笑満堂　高津　有二

其二『先韻』聯句

新鶯一聲破春眠　葦舟　中山　清
老輩吟行賞櫻専　礒野　衛孝
城跡喬松栄華傳　水城まゆみ
櫻彩映溝春色鮮　孚允　梅本　光男
城樓眺望萬頃田　三上　光敏
蒼松白壁帯輕烟　田原　健一
一望青青麦盈阡　谿月　室橋　幸子
函嶺盤峙路連綿　在洲　桜庭　慎吾

終

◆総会のことを律詩にして見ました。

理事の石川省吾先生から、過日の総会のことを律詩にしてみたと、ご披露がありました。紹介します。

『神奈川県漢詩連盟総会』　石川　芳雲

此日晴和四月天　南風渡海到丘旋
薔薇苑裏参差傲　胡蝶葩間随意翻
屹立高樓騒客集　詠吟佳席美聲連
賞花詩話心腸養　濱港鷗盟逾欲堅

◆小田原城に登る

吟行の成果として、皆それぞれに小田原城をお詠みになっていると思いますが、先日の研修会で茅ヶ崎の飯沼さんの詩は、大変よく纏っていると、好評で高得点でしたので紹介します。我々が眺めた情景を過不足なく28字のなかに収められています。

『登小田原城』飯沼　一之

大瀛瀲灩緩春潮　大瀛　瀲灩　春潮緩やかに
函嶺嶔崎衝碧霄　函嶺　嶔崎　碧霄を衝く
治亂興亡一場夢　治乱　興亡　一場の夢
櫻花片片墜朱橋　櫻花　片々　朱橋に墜つ

◆春の研修会の作品から

6月に開かれた研修会は、2グループに分かれて、Aグループは6月16日18名、Bグループは6月24日23名、延41名の参加を得て、盛況であった。Bグループの23名に至っては、もう少し細分化しないと皆の意見発表の時間が足りないかなと嬉しい悲鳴、今後のことを考えさせられた。検討したい。

また、中山会長もその席で言っておられたことだが、参加されるみなさんの全体の作詩水準が確実に上がってきている。選句の段階で苦労されることを推測して、急遽今回から従来の持ち点3を5に変更した。

A，B各グループからの最高得点の詩をご披露する。

□Aグループ作品（18篇参加　14点得点）

神代櫻(甲州客中詠)　吉岡　昭夫

嬉春僥倖到花前　嬉春　僥倖にして花前に到る
萬朶芳葩似瑞煙　萬朶の芳葩は瑞煙に似たり
聞説長生凌鶴壽　聞くならく　長生　鶴壽を凌ぐと
清容自若宛神仙　清容　自若として　さながら神仙

吉岡氏談

漢詩修行中の身にとっては、思いもかけぬ出来事で、望外の喜びです。まさにビギナーズラックと心得ておりますが、これを大きな励みとして、今後一層の精進にあい務めます。

□Bグループ作品（23篇参加　17点得点）

黄沙　　中島　龍一

春到黄沙東海旋　春到りて　黄沙　東海に旋る
遡源戈壁玉關邊　源を遡れば　ゴビ　玉關の辺り
風霜為粉戦場骨　風霜　粉と為す　戦場の骨
萬古歸心飛一天　万古の　帰心　一天を飛ぶ

中島氏談

黄沙の季節に出会って、この砂は或は玉門関あたりから飛んで来ているのではないかと想像を逞しくして作った詩です。東海までは飛び過ぎで中国本土内で留めておいたほうが収まりが良いというご意見を頂きました。東海を東野とか城市に変えようかと思案中です。

◆漢詩は難しい！

初心者入門講座受講生のアンケートから

第4回初心者入門講座は6月29日を以って無事終了した。

当初受講希望者は40数名を越え、どうなることかと心配したが、種々、準備をお願いする段階で、難しそうとか漢詩の鑑賞と誤解していたとかで、初日は26名のスタートであった。

今年の特徴は、熱心な生徒さんが多く脱落者が殆ど無かったこと、6月の最終授業には25名全員が『卒業作品』を持って出席した。新しい漢詩人が無事25名誕生したことになる。嬉しい限りである。

受講者からアンケートを頂いたので少々紹介する。

漢詩の難しさ、奥深さを思い知った。漢詩のルール、「だれ漢」の使い方、詩語表の使い方が大体判った。ただ詩語表に無い自分の気持ちを表す詩的な言葉をなかなか見つけ得ない。(森川氏、板本氏、横溝氏ほか)

授業後半のグループ活動が有益であったし、指導する先生の熱心さに感服した。(池上氏鈴木氏中西氏ほか)

実践的な講座で始めは戸惑ったが、要は自助努力「自分が作るのだ」との強い気持ちが大切と思い知った。(松本氏)

中国の知人と漢詩について話が出来るようになり、お陰で私を見る眼が変わった。(木村氏)

漢詩の鑑賞が自己流であった。新しい視点で漢詩を楽しみたい。(田中氏)

毎回の講義の簡単なレジメが欲しい。(大原氏)

漢詩作りは人間修行の場、先生のやり直しの命に何度も自尊心を壊された。未熟さを見抜いて閻魔様の如し、自分の言葉に酔い痴れぬように する。(浜辺)

最後に、卒業作品25首の中でどれが良いか皆で投票しての最高得点の詩を掲載する。

『硫黄島摺鉢山』　田中　成器

風聲切切度蒼茫　風声切々として蒼茫を度り
絶海孤山對夕陽　絶海の孤山　夕陽に対す
渇水飢糧埋萬骨　水に渇し糧に飢え万骨埋み
鬼魂漂没未還郷　鬼魂　漂没し未だ郷に還らず

神奈川県漢詩連盟創設5周年記念詩集

『神奈川清韻』大募集！

我県連盟は今年10月をもって創立5週年を迎えます。之を記念して『神奈川清韻』と銘うった詩集を発行します。

締切りは今年11月末です。奮ってご応募願います。

漢詩作りを休んでおいでの方も、これを期に刀の錆を落としてください。

机に眠ったままになっている過去の秀作を埃を払ってお出しになるのも宜しいかと考えます。

一〇〇人・一〇〇首が目標です。

要は、参加することに意義ありです。

【募集要領】

▼趣旨　記念詩集の刊行により、会員の作品発表の場を拡げ、更なる作詩への意欲、向上心を発揚する。

▼対象　神奈川県漢詩連盟　会員

▼題　自由

▼作品　「七言絶句」または「五言絶句」

一人一首　未発表作品に限る。但し当連盟主催の研修会などに参加されて提出された詩などは未発表と見做します。

（従って今年秋の研修会の場を旨く活用されて、推敲を重ねられての提出も一策と考えます。）

▼用紙　同封の応募用紙を使用のこと。

前回配布した用紙で、書き下し文は文語体使用の注記をしてましたが、口語体と訂正します。

▼締切り　平成22年11月30日（火）

▼平仄のチェックは、提出前に必ずお願い致します。

▼優秀作の表彰は、無しとします。

▼監修については当連盟顧問窪寺啓先生にお願いする予定です。詩集刊行の最終チェックの段階で、先生による小さい添削はありとします。何せ後世に残す詩集ですのでご了解下さい。

▼発行は平成23年1～2月頃の予定です。

▼「合評会」　監修の窪寺先生の講評を軸としての「合評会」を、刊行記念パーティを兼ねて実施する予定です。（来年2月頃の予定）

本の紹介

◆岡崎副会長の新刊『人と出会う』

今春、我県連の副会長である岡崎満義氏の本が、岩波書店から出版された。

ご承知のとおり、岡崎さんは元「文芸春秋」の編集長で芥川賞の選考会の司会もされたような素晴らしいキャリアの持ち主である。その折の逸話は時々「全漢詩連会報」で拝見していたが、今回“一編集者の印象記”とのサブタイトルでまとめられて本と成った。

読後の印象は、とにかく“面白い”の一語である。一読をお勧めする。

岡崎さんの柔軟な観察眼は、その人との真摯な出会いを通して的確である。優れた才能と強い個性を持った知識人、芸術家、アスリート達の一癖も二癖もありそうな人となりが、素顔が目に浮かぶように立ち上がってくる。これを活写する文章は、将に岡崎氏のあの大きな体にふさわしい大きな心を髣髴とさせて、柔らかで温かい。

清水幾太郎と遠山景久と岸信介との行き違いの多い噛み合わなかった対談、小生も大学でゼミの講義を聴いたことのある向坂逸郎の逸話，佐佐木茂索に対する作者の敬愛の念などなど数えれば限が無い。

詩友H氏は一気に読むのは勿体無いので一日一人にしている由、38日も掛かる。

40年近くマスコミの前線で編集者として沢山の人と会って得た一つの結論、作者が最後に言いたかったこと、重く受け止めたい。

“自分探しをするくらいなら、よき他人を探して会い、話を聞くことだ。”

（田原）

「扶桑風韻」第8号の課題は花です。（締切は10月31日）先の神奈川県漢詩連盟総会の記念講演「花を詠う詩」は、作詩のヒントになるはずです。

花を詠う詩

石川岳堂

今日は花と云うことで12首選びました。花も色々ありまして、古くは詩経の「桃の夭夭たる」。このように目につく花から始まりまして、唐の時代になると目につかない花を詠う。唐の半ばすぎ位から目立たない花にも目を向けるようになる。

そのきっかけを作ったのは白楽天です。白楽天の蕎麦の花。これは小さな花で、観賞向きにはならない。蕎麦と云うのは豊かな田畑には作りませんから、山合いの、田舎の風景の中で見られるものです。今迄の詩人は取上げなかったのですが、わざわざそういうものに目を向けて詩を作ったのです。

プリント最初は杏の花。これは季節には目立つ花です。杜牧の「清明」から始めましょう。

「牧童」がこの詩のカギだ

清明　杜牧　清明

清明時節雨粉粉　清明の時節　雨粉粉
路上行人欲斷魂　路上の行人　魂を断たんと欲す
借問酒家何處有　借問す酒家　何れの処にかある
牧童遙指杏花村　牧童遙かに指さす杏花の村

日本でも四月の始め頃になると雨が良く降る。菜種梅雨です。杜牧の時代も、清明の時節は雨粉粉。路上の行人と云うのは自分のこと。行人は旅人。「魂を断たんと欲す」は漢文で読むと非常に固いことのように見えますが、「気が滅入る」と云うことです。

雨がしとしと降って気が滅入るなあ、気晴しに酒でも飲みたいなぁ、どこかに酒家がないかと思って見ると、向こうの方から牧童が来る。牧童は牛を連れて来る子供の事ですが、実は牧童と云うのがこの詩の一つの鍵なのです。中国の詩の世界では、俗世間に対して超俗世間がある。この超俗世界の人が三種類あって、そのうちの一つが牧童です。あと二つは木樵りと漁父。ですから、ここで牧童が出て来たと云うことは、詩の舞台が俗世間ではない。牧童遙かに指す杏花の村。そこには、他の杜牧の詩にも出て来る酒旗、酒屋ののぼり、酒帘とも云うし、青い色をしているから青帘とも云う。

それが雨にそぼぬれて見える。こう云う図だと思います。牧童は、答えてあっちだよと、青い旗と杏の花は白くて小さい花ですけど、合せて彩りになっている。杏の花は脇役です。主役は牧童なんです。牧童の遊ぶ世界で、そこに自ずから超俗の世界が浮上って来る。

酒家何れの処にか有るの「有る」については、「在」ではないのかと云う質問が良く出る。在でも成り立ちますが、在だと存在を尋ねるので、ある事が分っていて尋く。「有」だと有るか無いかを尋く。ですから、この場合は在では面白くない。言葉の気分が違うのです。粉・魂・村と「元」の韻です。

次に梨。これも小さな花です。

和孔密州五絶　蘇軾　孔密州の五絶に和す
東欄梨花　東欄の梨花

「東欄の梨花」が詩の題で、「孔密州の五絶に和す」は前置きです。

密州は地名。今の山東省青島の近く。蘇東坡はそこの知事をしていたのですが、孔子のご子孫の孔さん、四十六代目の人ですが（今は七十九代目になる）、その人の詩に和した。

五絶と云うのは五言絶句ではなくて、五首の絶句の意味です。五つ貰ったから五つお返しをした。そのうちの三つ目。

梨花淡白柳深青　梨花は淡白　柳は深青
柳絮飛時花滿城　柳絮飛ぶ時　花　城に滿つ
惆悵東欄一株雪　惆悵す　東欄一株の雪
人生看得幾清明　人生　看得るは幾清明

梨花の花は淡く白く、柳はまっ青だ。上の四字と下の三字は同じ構成になっていますから、こう云う構成を句中対と云います。句中対にすると調子が良くなる。

柳の綿が盛んに飛ぶ時に花は街　ぱいに満ちるのである。柳絮は中国では風物詩になっていて、北京辺りは凄い、公害と云って良い位飛んで、婦人はヴェールかぶって避けたり。前半ここまでは前置きになっていて、惆悵す、これは頭に同じ「ち」が来る。双声語と云います。後の方が揃うのは重韻語と云う。重韻語と双声は良く出て来る。

東欄の欄は花壇の柵のことで、梨畑の柵に一株、雪のように梨の花が咲いている。この美しい梨の花　人生看得るは何回の清明にめぐり合えてのことだろうか。この詩は梨の花のはかなさを謳うことによって、人生のはかなさを詠んでいる。梨は白くて淡い色をしているので、無情と云うことに通ずると云えば通じるでしょう。尚、杜甫の時代の先輩の白楽天に、長恨歌があるでしょう。楊貴妃と玄宗の物語ですが、楊貴妃の泣きぬれている様子を白楽天が「梨花一枝春雨を帯ぶ」と形容している。春の雨にそぼぬれてぼーっと煙っている、淋しい花です。美しい上に淋しい花でありますから、人生の無情と云うのを引き出すのには打ってつけです。第一句は青、二句四句はこのように、A・B・Bとします。通韻の原則は庚の韻ですから通韻しています。二つの韻を交互に混ぜてはいけない。

次に牡丹の花に行きます。牡丹の花は豪奢な花で、国色と云います。国の色、国を代表する色だと詠われている。この牡丹は、唐の栄えた時代には、最も流行った花で、金持ちは金にあかせて牡丹の花を育てた。そこで進士の試験に及第した若い才子は馬に乗って、どこの家の牡丹も無礼講で見て良いという、洒落たならわしがあったようです。「一日看尽くす長安の花」孟郊の詩ですネ。国色とも云うし長安の花とも云った。韓愈の弟子、弟子と云っても韓愈より年が上なのですが、この孟郊は何遍も何遍も試験を受けて落第している。彼の詩集を見ると、落第、又落第、又又落第と落第の詩ばかり。ところが最後に受かったのです。受かった時は47～48歳になっていた。彼は飛び上がって喜んで、「一日看尽す長安の花」、余りに嬉しかったからかどうか分からないが、この詩は平仄が出鱈目。長安の花は平・平・平です。嬉しくて、平仄など構ってはいられない、その辺にも喜びの大きさが判ると思います。

「天香國色」という言葉

さて、劉禹錫はどのような詩を作っているか。

賞牡丹　劉禹錫　牡丹を賞す

庭前芍藥妖無格　庭前の芍薬　妖として格無し
池上芙蕖淨少情　池上の芙蕖　浄くして情少し
唯有牡丹眞國色　唯だ牡丹のみ　真の国色有り
花開時節動京城　花開くの時節　京城を動かす

庭の前に咲く芍薬は妖しげな美しさがあるけれども、風格がない。池の上の蓮、これも浄らかで美しいが、一寸情が少ない。

と、芍薬と蓮を褒めつつもけなしている。それに較べると、矢張り牡丹だ。唯だ牡丹

のみ、本当の国の色がある。牡丹の花の咲く時節になると、都中がどよめいている。いかにも国色、「天香国色」と云う言葉がある。牡丹のために作られた言葉です。豪奢な花であります。牡丹の花の詩は沢山あります。

第一句と第二句は対句になっているので、第一句は踏み落しになっている。一・二句が対の場合は、一句目は韻を踏まないのです。二句目・四句目が情城と、八「庚」の韻になっている。

次は**杜鵑花**、これはつつじのことですネ。

宣城見杜鵑花　李白　宣城にて杜鵑花を見る

蜀國曾聞子規鳥　蜀國曾て聞く子規の鳥

宣城還見杜鵑花　宣城還た見る杜鵑の花

一叫一廻腸一斷　一叫一廻腸一斷

三春三月憶三巴　三春三月、三巴を憶う

これは言葉遊びですネ。

蜀の国で曾てほととぎすを聞いた。ほととぎすと云う鳥は色んな名前を持っている。子規もそうです。

宣城でまたほととぎすの花を見る。杜鵑もほととぎす、杜鵑の花と書いてつつじの事なのです。ほととぎすは鳴いて血を吐くと云うように、つつじは血のような色です。ほととぎすが鳴く頃、丁度満開になって、面も鳴いて血をはくと云う血の色の花ですから、杜鵑花と云います。子規と杜鵑とは、どちらもほととぎすを意味しますが、使いわけをしている。

これも第一句第二句は対句になっていて、矢張り踏落しにしている。

この講演記録は、先の神奈川県漢詩連盟総会での記念講演でもあり、全日本漢詩連盟の会報の編集者岡崎様、記述者住田様のご了解の下、「全漢詩連会報」第29号から転載させて頂きました。

杏、梨、牡丹……など十二の花をとりあげて、中国の詩人たちはいかに詠んだか、いかに新しい世界を発見したか―詩の核心に迫る！

一叫一廻腸一斷　三春三月三巴を憶う。一・一、三・三・三。

ほととぎすが一度び叫び、一度び廻ると、聞く者は腸が飛び出てしまう。いわゆる断腸の憶いになってしまう。悲しい。

三春と云うのは春三ケ月、その三春の三月、晩春になります。

三巴と云っているのは、李白の故郷が三巴。厳密に云うと巴と云うのは現在の四川省の東の部分を云う。酉の方を蜀、合せて巴蜀と云うがここは三巴と云う。大きく巴蜀全体を云っている。ほととぎすは「不如帰」と鳴くと云います。「不如帰」。徳富蘆花の小説はこう書いて「ほととぎす」と読ませています。これはほととぎすの鳴き声から来ている。中国語では「フー・ロー・グェ」余り似ていないが、日本では「東京特許許可局」だが「フー・ロー・グェ」帰るに如かず。帰るに如かずは、帰りたい帰ろう、と云う意味です。昔蜀の国に望帝と云う皇帝が、居たんだけれど家来にとらわれて悲しみの余りほととぎすになってしまった。そして帰りたい、帰りたいよと云って泣いた、と云う伝説がある。悲しい鳥なのです。これは前半も後半も対句になっている。全対格と云います。韻は花、巴、「麻」の韻です。

「水晶」で透き通った涼しさ

次に薔薇が出て来ました。ばらも、豪奢な花でありまして、又貴族の館などに似合う。高駢「山亭夏日」の山亭は、貴族のお庭。高駢と云う人は出世をして、最後は渤海郡王、偉いですネ。公爵なんかよりもっと偉い。王号を貰っています。「山亭」は王号のある高い地位に居る人の豪奢な山荘、別荘です。

緑樹陰濃夏日長　緑樹陰濃やかにして夏日長し

楼臺倒影入池塘　楼台影を倒にして池塘に入る

水晶簾動微風起　水晶の簾動いて微風起こり

一架薔薇満院香　一架の薔薇　満院香し

夏の暑い日、緑の樹の陰が濃やかである。濃やかは、濃い、くろぐろと樹が陰を落しているわけです。これだけで、日射しが強いのが判る。強いから黒っぽい陰が出る。夏の日は長いなあ、第二句を見ると、大きな山荘だから広い庭に楼台もあり、池もある。その池に高どのの姿が写っている。影を倒しまにして、と云うのは、丁度反対に池に写っているから。それで風が無いことが判る。あったら楼台の影は写りません。

前半の二句を見ると濃い樹の陰と云い、又楼台が池に写っている姿と云い、風も無く、日がじりじり照りつけている暑い夏の日が良く描かれている。暑いのですけれど、楼台あり、緑樹が沢山あり、この別荘が矢張り奥深く広く豪勢なものであることが判ります。

後半は部屋の中。

水晶の飾りのついた御簾が動くのは、そよ風が来たから。これは風が吹いたからすだれが動いたのですけれど、認識の順序はすだれが動くことが先に判って、あ、風が来たんだな。と、この通りで良いわけです。水晶は飾りについているので、全部水晶ですだれが出来ているわけではないが、水晶と云うことで、すき通った涼しげな感じが出ている。そこで微風。それによってにおいが運ばれた、「一架の薔薇満院香し」。庭にばらの花が咲いていた。風によってその香りが運ばれて来た。満院の院は屋敷です。屋敷中にその良い香りが満ちている。「満架の薔薇一院香し」と云っても意味は同じです。庭いっぱいのばらが部屋いっぱいに香っている。ばらの花は上品な花ですから、貴族の館に相応しい。

長・塘・香、七「陽」の韻です。

大正天皇はすぐれた漢詩人

さて、大正天皇。この詩を今日はお話ししたいのです。実は最近大修館から「漢詩人・大正天皇」を出版したばかりなのです。大正天皇は余り良く言われていない面もあるのですが、漢詩については大正天皇は歴代125人の天皇の中のナンバーワン。数も多いし、質も優れている。今日のこの御作は、何と数え年18歳の時の御作です。満だと16歳、高校一年生か二年生。漢詩をならい始めのホヤホヤの作です。先生の三島中洲が多少手を入れたかもしれないが、それでも土台が良かったものと思います。目黒村、今は村どころの騒ぎではないが、あの目黒です。西郷従道の大きな別邸があった。そこへ当時は皇太子殿下の大正天皇が遊行された。その時の御作。

雨餘村落午風微　雨余の村落　午風微なり

新緑陰中胡蝶飛　新緑陰中　胡蝶飛ぶ

二様芳香來撲鼻　二様の芳香来りて鼻を撲つ

焙茶氣雜野薔薇　茶を焙るの気は雑わる野薔薇に

雨上り。目黒村。昼の風がかすかに吹いている。風が吹いていることが大切。

新緑の樹の陰から蝶々がひらひらと飛んで来た。まず新緑の樹のくろい陰、その黒っぽい処から白い蝶々がひらひら。この蝶々が読者の視線を誘っている。

二通りの良いにおいがして来たぞ。香りが鼻を撲つ、これは風が吹いているからなのです。第一句でちゃんと午風微なりと。生垣があって、生垣の中は農家、農家ではお茶を焙っている。そのお茶のにおいがプーンとして来る。農家でお茶を焙っている姿は、生垣の向うだから見えない。蝶々がひらひらと来て生垣の方へ行く。その方に野ばらが咲いている。その野ばらの方からも良いにおいがする。とても良いセンスです。「二様」と云う言葉は実は生まな言葉です。古典にはない。こ

香気満ちる花の詩の数々。豊かなミクロコスモスをかたちづくる名詩を十分に味わいたい

の辺りは素人っぽさが出ているのかも知れない。逆にこのことが、この作が本当に皇太子殿下の御作だと云うことの証明になる。

それにしても、習い始められてからまだ三ヶ月位の御作で、センスが良いことを特に大きな声で云いたい。良く云われなかったのは、大変にお気の毒な事で、私に云わせれば大正天皇は大変な詩人であります。

暗い木陰から蝶々が飛ぶことによって、それが視線を射る。そのひらひらと行く先に赤い野ばらが咲いている。目に訴え、鼻に訴え、風が吹くから肌にも訴えている。この詩はぜひ高校の教科書に採用して欲しい。

微・飛・薇、「微」の韻です。

次は**向日葵花**。向日葵は実はひまわりではないんだそうです。詩中に「日に向って傾く」とあるし、これまでずーっとひまわりだと思って解釈して来た。ところが、植物学者から、かの大漢和辞典を作った鎌田先生の処に投書が来た。大漢和辞典には「向日葵」＝ひまわりと書いてある。この詩の当時は中国にはまだひまわりは伝来していない、アンデス山中にのみあった、と。アンデス山中から中国に伝わったのはずーと後の明の頃、との事で鎌田先生は謝った返事をお書きになったと云う内容のお話を聞きました。

初夏　司馬光　初夏

四月清和雨乍晴　四月清和　雨乍ち晴れ
南山當戸轉分明　南山戸に当たって　転た分明なり
更無柳絮因風起　更に柳絮の風に因って起こる無く
惟有葵花向日傾　惟葵花の日に向かって傾く有り

四月は陰歴で夏です。四、五、六月が夏。清和は四月一日。因みに旧暦では今日（五月十四日）が四月一日で今日から夏です。昨日迄は春でした。私は新しい手帳には旧暦を全部書き込みます。旧暦の方が漢詩をやるのには良いのです。現代人は月に余り関心がないが、昔の人は良く月を見ていて、満月の時は必ず詩作をし、或は宴会をしたものであります。

さて、清和にさあっと雨が降って、いい具合に上った。南の山が戸口の向う、戸に当る、と云うのは、戸口とま向い、転た、と云うのは、いよいよ、ますますと云う副詞です。いよいよはっきり出る。良い雨が降ったから尚さらますますはっきり見えるのです。司馬光がこの詩を作った処は洛陽です。

後半の二句は対句です。

もう柳の綿が風に乗って飛んで来ることも無い。ただ葵の花が、太陽に向かって傾くのがあるばかり。

つまり、主役の交代。昨日迄春だったが、今日から初夏になったので、柳絮はもうおしまいで、これからは「ひまわり」と云いたいですネ。ひまわりが陽に向って我がもの顔に咲く。主役の交代、こう云う処に目をつけたのです。そこでこの柳絮についていえば謝道韞と云う詩人、四世紀の人ですが、雪を柳の綿に見立てた、「柳絮因風起」の五字は、謝道韞の句です。叔父の謝安と云う人と姪や甥が沢山集まっていた時に、叔父さんが目の前の雪を何かになぞらえて御覧、と云った時に、甥の一人が、空から塩がまかれたようだ、と云った。面白いが、余り風流ではない。そこへ謝道韞が柳の綿が風によって飛んでいるようです、と云った。うん、お前の方がずっと風流だと、褒められたと云う故事による。謝道韞は、謝霊雲と云う詩人の祖父の姉、大叔母に当る。第一句は冒韻になっていますが、冒韻は余りやかましく云わなくとも良い。清和の清が韻字の晴と同じ八「庚」です。

次は荷（蓮）花「はす」です。

からたち、けしの花を詠む

野塘　韓偓　野塘

侵曉乘涼偶獨來　暁を侵し　涼に乗じて　偶ま独り来たる
不因魚躍見萍開　魚の躍るに因らずして　萍の開くを見る
捲荷忽被微風觸　捲荷忽ち微風に触れられ
瀉下清香露一杯　瀉ぎ下す清香の露一杯

晩唐から宋に移る、少し理屈っぽい傾向の詩の先駆です。

朝早く涼気に乗じて、偶ま独りでやって来ると、魚が躍ったのではないのに、水草が開いた。何故だろう。それは、くるりと巻いたはすの葉が、そよ風に触れられて、さらさらと、清らかな香りを含んでいる露を、そそぎ下した事であった。はすの葉が巻いていて、そこに露が宿っている。自らいいにおいがするので、清香と云っている。これが風にゆられて、ころころっと落ちたと云うので、まことに観察が細かいです。品の良い詩です。なかなかこう云う処には気がつかない。一つの新しい世界の発見と云って良いでしょう。

來・開・杯、「灰」の韻です。

さて、次の雍陶の作品は二つありますが、これも新しい発見。先程そばの花の話をしましたが、そばの花をきっかけにして、従来は詩の世界に入って来なかった処を詠む。最初は**枳穀花**、枳穀はからたちの花です。

城西訪友人別墅　雍陶　城西に友人の別墅を訪ぬ
澧水橋西小路斜　澧水の橋西　小路斜めなり
日高猶未到君家　日高くして猶未だ君が家に到らず
村園門巷多相似　村園門巷多くは相似たり
處處春風枳穀花　処々の春風　枳穀の花

澧水と云うのは、西から東へ流れて洞庭湖に注ぐ河です。その澧水の橋の西の方へ小路が斜めに続いている。小路と云っているのは、大きな風景ではない。小さな風景に似合うのが、この枳穀の花なのです。からたちの花は小さくて観賞に耐えるような花ではありません。場面を小さく、又ひなびたものにしている。舞台が小さい。日が高く昇っても、まだあなたの家には着きません。相手はどうやら隠者っぽい。隠者先生の処へブラリブラリと行くのです。村の畑や路地が皆良く似ている。似ていると云っているから、枳穀の花はそこいら中にあるのです。一軒の家にぽつんとあるのではない。そこら中。それが分かるように伏線をはって、舞台装置を整えている。どこへ行っても同じような家があって、同じように枳穀の花がある。いかにもひなびた田舎風景を詩にしている。これが美しいと云う事を見つけたのです。

今度は同じ雍陶の**米囊花**、けしの花です。これも面白い花ではありますが、今迄の人は詩では触れなかった。

西歸出斜谷　雍陶　西に帰りて斜谷を出づ
行過險棧出褒斜　険棧を行き過ぎて　褒斜を出づ
出盡平川似到家　平川を出でつくせば　家に到るに似たり
無限客愁今日散　無限の客愁　今日散ず
馬頭初見米囊花　馬頭初めて見る米囊花

褒谷は谷の名前。雍陶は四川省出身で、故郷へ帰る。危険な山棧道を超えて、平らな川の処へ出ると、もう家に着いたような気がするなあ。ほっとした。ほっとした目に、無限の客愁今日散じて馬頭に初めてけしの花が見えた。蜀の地にはけしの花が多いのでしょう。けしの花が沢山咲いているなあ、と云ってけしの花に望郷の思いを込めている。

さるすべりと蕎麥の花の詩

次は楊万里の**紫薇花**。紫薇の花はさるすべり、夏の花です。

道旁店　楊萬里　道旁店
路旁野店兩三家　路旁の野店　両三家
清曉無湯況有茶　清暁に湯無し　況んや茶有らん
道是渠儂不好事　是れ渠儂は好事ならずと道わば
青瓷瓶挿紫薇花　青瓷の瓶に挿す紫薇の花

楊万里は南宋の詩人で、今日の中では大正天皇以外で一番後輩です。

路ばたの野の茶店が二軒、三軒。朝で湯が

（次頁下段に続く）

◆漢詩愛好家訪中団に参加して
山西省の名勝古跡を訪ねる

櫻庭　慎吾

石川忠久先生を団長とする第26回漢詩愛好家訪中団に加わり、本年4月27日より7泊8日の旅程で山西省の名所旧跡を訪ねた。印象に残った主なポイントを以下に報告したい。

今回の目玉は、王之渙の“更上一層楼”で有名な**鸛鵲楼**より黄河を望むことであった。

《麦穂波　黄河は天に　連なれり》

現代の鸛鵲楼は鉄筋ビルの6階建てだが、外見上は3階建てのように出来ている。

《対岸を　閉ざす黄河の　夏霞》

鸛鵲楼の最上階から望む景色に暫く見とれていた。

◇**黄河大鉄牛**　濁流の渦巻く黄河の浮橋の、橋索を固定するアンカー。重さ40トンにも及ぶ鉄製の牛。唐代には既に秀れた製鉄技術があってこの牛は鋳造されていたことを物語っており驚異である。鉄牛の傍らに立つ牛飼いは胡人の風姿、当時から異民族への同化政策の様子が窺われ興味深かった。

大鉄牛を囲んで左より住田笛雄氏
菅原満氏、石川忠久先生、筆者

◇**解州の関帝廟**　黄土高原を北から流下した黄河は、山西省の南西端で直角に折れて東流を始める所に運城市解州がある。解州は三国志の英雄、関羽の故郷である。魏と呉の連合軍に攻められ奮闘したが、戦死した関羽の首は呉の孫権から魏の曹操の許へ送られたと言う。魂だけが空しく故郷へ還ったが、後人はその武勇を憐れんで関帝廟を祀ったと言う。隋代の創建で、国内の関帝廟では約2万平方米と最大の規模、世界中にある関帝廟の祖となっており香煙が絶えない。

◇**汾酒**　山西省の名酒は何と言っても汾酒である。黄河に東側より注ぐ汾河の中流域、汾陽がその主産地である。度数は38度から68度と着火できるほどのアルコール含有度の高さで、その強い香りは山西料理に良く合う。

謝関谷梅塘女士見贈汾酒

黄河滾滾接天横　黄河滾滾として　天に接して横たわり
関廟欲祀尋解城　関廟祀らんとして　解城を尋ぬ
高擧晩餐汾酒盞　高く擧ぐ晩餐　汾酒の盞
遙懐雅友懇親情　遙かに懐ふ　雅友懇親の情

（今春、神奈川の小田原吟行にも参加された関谷梅塘女士（都漢連）は、旅行に参加できぬお詫びとして、幹事を通して汾酒の名品を差し入れて下さった。）

山西省は中国文明発祥の地で、中国の文物の70%が集中していると言う。名勝古跡の数も多く今回はほんの一部の勝景文物を見たに過ぎない

終

無い。ましてお茶がある筈がない、おさえつけてけなしている。では、この田舎の店のおやじは、好事者ではないと云おうか？いやいや、そうではない。見てごらん。青瓷の花瓶にさるすべりを挿しているではないか。青瓷の花瓶に、紅いさるすべりの花が活けてあるのです。こう云う風流を解する男だなあ、と云って褒めています。褒めるために、前の方で泛しめている。

最後に**蕎麥花**。この白楽天の「そば」の花は、最初にご紹介しました。彼は順風満帆で出世街道を進んだ男ですけれど、えてしてそう云う時は足を引っぱる輩が出て来て、失脚します。その失脚の前に彼の母親が死にまして、喪に服していた。そのような時に作った42歳頃の作品です。

村夜　白居居　村夜

霜草蒼蒼蟲切切　霜草は蒼々として虫は切々たり
村南村北行人絶　村南村北　行人絶ゆ
獨出門前望野田　独り門前に出でて野田を望めば
月明蕎麥花如雪　月明らかにして蕎麥花　雪の如し

第一句は最初の詩と同じように、句中対になっています。上四字と下三字の構造が同じですネ。前半の二句を見ると、季節はもう秋です。霜草霜に打たれた草で、季節は秋。その秋の季節に虫がチッチッと鳴いている。村の南も村の北にも、誰も行く人が居ない。そこで独り門前に出て野の田んぼを見ると、月が明るく、その下にそこいら中、白いそばの花が咲いていて、まるで雪のようだ。これは本人が母の喪に服していて、佛教でいう清浄の世界を描いていると思う。今迄は俗世間に居て、出世街道をまっしぐら、俗塵にまみれていた。そこから喪に服して、脱俗して田舎に引っ込んだ。昔は高級官僚は親が死ぬと皆辞職して喪に服します。25ヶ月。足かけ三ヶ年です。そこで俗世間から離れて、清浄世界に移る。そんな詩です。功・絶・雪が「屑」の仄韻。今日はこれで。　〔文責　住田笛雄〕

◆志士　遠山翠

岡崎　勝郎

幕末遠山翠の号を称する志士がいた。その名に相応しい大層なロマンチストで、訪歴した各所で詩文をものにした。

烟草畦邊一逕分　鷄聲馬語隔林聞
吟筇輕伴吟魂去　水送山迎入白雲

十九歳、羽州米沢藩士として近郷高畠の郡奉行所に出向いたときの作。

明かせば遠山翠とは雲井龍雄の変名である。のちに彼二十三歳にしてその英才を見込まれて、京都に揺籃した新政府の集議官(貢士)に選抜された。

ところが新政府との意見の食い違い、就中薩摩勢力の庄内会津両藩に対する仇怨追討の暴戾を視るに及び、敢然これを指弾し且つ建言を再々試みるも容れられず、任僅か一ヶ月にして席を蹴って京都を去った。

欲成斯志豈思躬　埋骨青山碧海中
醉撫腰刀還冷笑　決然躍馬向関東

題は「題客舎壁」、ときは恰も奥羽列藩の重臣が白石城に集い、庄会両藩の叛意無きを朝廷に奏請せんと議していた頃。そもそも米沢はその歴史からしても会津藩とは義兄弟にも等しい友藩である。雲井の立場からすれば眞に"烈士多悲心"(曹植、雑詩其六)と謂わんか。

慶応四年(明治元年)から二年余り、雲井は江戸数寄屋橋辺の船宿に寓することがあった。身危うし疾く帰藩せよとの国許からの催促ものかは、彼を頼ってくる佐幕派浪人たちと密かに回天の機を覗っていたのだった。

彼の足跡を辿れば㈠奥羽越列藩同盟の支援、㈡集議官に復帰してなお薩と長州の離反を謀った「倒薩檄」を官第に配布、㈢結果、免官されその過程で芝二本榎某寺を借り戊辰の敗残浪士多数の世話、㈣房州船橋での回天の謀議(実は謀議取止めと解散の相談)、㈤潜伏そして捕縛、という事になる。

前述の船宿で縛せられ一旦は米沢へ護送され謹慎の身となるが、日永からずして明治三年八月檻車で東京へ送還された。

その年十二月「朝憲紊乱の大罪」の科を以って伝馬町揚屋で斬首、小塚原に梟首された。享年二十七歳。

[辞世の詩]

死不畏死　生不偸生　男児大説　光與日争　道之苟直　不憚鼎烹　眇然一身　萬里長城

(死して死を畏れず、生きて生を偸まず、男児の大節、光は日と争う、道苟しくも直ならば、鼎烹も憚らず、眇然たる一身、万里の長城)。

この男に影響を受けた文人に若き日の北村門太郎がいる。影響とは雲井の「透谷の寓居即事」「瓶梅十絶」などの漢詩文に魅され、それ以上に雲井の人となり、孤高の精神への尽きせぬ敬慕があった。

門太郎は明治十五年に数寄屋橋の泰明小学校を卒えている。透谷の寓居人が処刑されたのはその僅か十一年前である。門太郎はのちに「透谷」の号を用いることになる。

筆者は昨年秋小野川温泉に宿し、一日を米沢市街の散策に費やした。これを機に七軒町の常安寺を訪ねて雲井の墓前に立った。寺門の傍らにかれの略歴と銅版写真が掲示してあり、張良もかく哉と思わせる女性的な貌で、切長でいながら不羈な面構えの射るような眉目であった。この眼には筆者も参った。　終

張良＝博浪沙で始皇帝を襲った張良は「美好如婦人」(王安石)で知られる。

◆自詠自画の世界

創立以来の会員、国田公義さんは、多趣多才の人で、83歳にしてなお詩作に油絵水墨画と筆を振るっておいでです。先月、某展覧会で自画自賛の水墨画を拝見しました。

まさに詩画一致の世界でした。

『西条城跡同窓会』
老朋参集故城中
師弟難分白髪同
半酔郷音還往事
棟門依舊夕陽紅

画もさることながら、同窓会の詩、特に承句の"師弟分ち難し白髪同じ"に感嘆しました。

告知板

その1.【秋の吟行会】

城ヶ島を眺め、三崎でマグロを！

□日時　11月29日(月)　午前10時～
□集合場所　京浜急行「三崎口駅」
　改札口前に集合
□行程　三崎口駅よりバスにて城ヶ島へ(30分弱)→城ヶ島探索(10時半～11時半、1時間程度)→三崎港へ
□昼食及び懇親会「三崎館本店」にて
　(12時～2時半　2時間半)→港市場見学(2時半～3時　30分程度)→京浜急行「三崎口駅」3時半に乗車。
□柏梁体　韻字と用紙は集合時に配布、散策の途中で作ってください、懇親会で石川先生の選で秀作を披露します。
□参加費　5千円　(昼飯代)
□申込　同封葉書又は水城まゆみ氏あてメールにて要返
　メール mmizuki@kfj.biglobe.ne.jp

その2.【栃木県連との交流会】

最古の藩校、足利学校を訪ねませんか？

去年、横浜へ観光に来られた栃木県漢詩連盟からお誘いがあり、加えて、来年秋に、足利で挙行される全国漢詩大会の運営で、ご苦労されるであろう栃木の皆様にエールを送る意味合いもあり、紅葉の足利学校周辺を詩材を探しがてら探策してみませんか？

□日時　平成22年10月27日(水)　26 火
□場所　JR足利駅前　午前11時半集合
　交通便はJRと東武線両方あり
□費用　自己負担(交通費約5千円、食事他)
□申込　同封葉書にて申し込む

その3.【扶桑風韻】に応募しよう。

全日本漢詩連盟の定期刊行誌【扶桑風韻】で漢詩を募集しています。但し、全日本漢詩連盟の会員であることが条件です。入会手続きについては事務局へ問い合わせてください。

今回の課題は「花」、先日の総会での石川先生の講演も拝聴したことでもあるし、参考にして神奈川県勢の実力を全国に示したいところです。

□応募資格　全日本漢詩連盟会員
□応募用紙　規定の用紙あり。応募料は無し
□締切り　10月31日(日)
□選者　石川忠久　服部承風　伊藤竹外　他
□発表　来年4月『扶桑風韻』第8号にて

その4.　諸橋轍次博士記念漢詩大会

新潟県漢詩連盟が去年発足させた全国ベース大会の2回目の募集。

今回から、選者は仏教大学教授の李冬木先生が主軸。優秀作上位三首に賞金が出る点がユニークです。

□受付期間　9月15日(水)まで
□応募料　2首まで1千円
□選者　李冬木　洲脇五東　佐藤亙
□漢詩大会　平成22年11月13日(土)
　新潟県三条市諸橋轍次記念館にて
(応募用紙は部数の都合で全員には配布していません。必要な方は事務局まで請求のこと)

◆平成21年度決算状況

先日の総会で承認された決算を報告します。

平成21年度　決算

収入

費目	21年度	20年度	増減
会員年会費	260	208	52
懇親会関係	310	196	114
漢詩大会関係	26	199	△173
研修会参加費	30	16	14
寄付金等	28	63	△35
その他	1	6	△5
合計	655	688	△33

支出　(単位＝千円)

	21年度	20年度	増減
通信費	99	93	6
印刷費	45	69	△24
文具雑品費	70	24	46
会場関係費	118	112	6
懇親会関係	266	152	114
漢詩大会費用	108	59	49
その他	34	88	△54
合計	740	598	142

21年度収支尻　△85千円　(20年度収支尻　90千円)
平成22年3月31日　年度末繰越残高　101,947円　(前期末残高　186,542円)
横浜開港150周年記念漢詩大会収支　20年度　120千円　21年度　△167千円　通算　△47千円

今年度後半のスケチュール

カレンダーに予定を記入しましょう。

● 秋の研修会

従来と同じ「選句会方式」で、2グループに分けて実施、都合のいい日を選んで下さい。

▽ 時期。Aグループ　平成22年11月9日(火)　午後1時～5時
　　Bグループ　平成22年11月17日(水)　午後1時～5時

▽ 場所　神奈川近代文学館　2階会議室

▽ 申込　同封葉書にて返事する。回答期限　平成22年10月25日(月)

▽ 詩稿提出期限　平成22年10月30日(土)事務局あて。　期日厳守のこと。

● 新人フオローアップ研修会

春の初心者入門講座に参加された方を中心に新人研修を行います。

▽ 時期　平成22年10月20日(火)午後1時～5時

▽ 場所　神奈川近代文学館　2階会議室　参加者は七絶一首、コピー30枚持参のこと

● 吟行会

今回は、晩秋の三崎海岸城ケ島周辺の散策です。詳細は11頁記事を参照。

▽ 時期　平成22年11月29日(月)　午前10時～

▽ 場所　京浜急行「三崎口駅」改札口前に集合

▽ 昼食　三崎港近辺でマグロ料理を食べます。

▽ 申込　同封葉書にて返事する。参加費　5千円　申込期限　平成22年10月25日(月)

● 栃木県連との交流会

栃木県漢詩連盟との懇親交流をかねて、紅葉の足利学校周辺を探訪します。

▽時期　平成22年10月26日(火)

▽場所　JR「足利駅」改札口、午前11時半集合(JR横浜駅9時の電車で足利着11時半。)

▽申込　同封葉書にて申し込む。食事代5千円程度　申込期限平成22年10月25日(月)

● 【神奈川清韻】の発行

神奈川県漢詩連盟創立5周年を記念し漢詩集を刊行します。奮ってご応募願います。

▽ 作品　「七言絶句」または「五言絶句」　一首限り　題は自由

▽ 締切　平成22年11月30日(火)

▽ 刊行　平成22年度内に発行、配布の予定です。

◆編集後記

余りに暑いので、他愛も無い水のような話。

「ねえ、丈二と友二が2人とも2位になったって電話。で、全国大会が八月、九十九里浜であるから、ジイバアも応援に来ないかって。」

「行かねえよ。剣道か空手だったら喜んで馳せ参じるけどね。」

「でも湘南地区の2位よ。それに中学の部で未だ1年生で2位よ。友二も小学高年4～六年組の4年生よ。由佳子は舞い上がってたわよ。」

「勉強はしないで波乗りに遊び呆けてんだろう。だいたい、俺はあのズンダレた乞食みたいな格好がなんとも嫌いでねえ。お前だって海に浮かぶゴミって言ってたじゃねえか。」

「あっそう、じゃ、私一人で応援して来ますからね。婿殿も嘆いていたそうよ、じいじいはサーフインに理解が無いからなあって」

「いや、違う。俺は先行きに繋がることを今やれって言ってんだよ。例えば、イチローとか石川遼とか見てみろ、稼いでっだろ。」

「やっぱし、貴方は俗物よ、漢詩なんかやって自分ではいっぱしの気分でいるのでしょうがね。サーフインは海という大自然の中での自分との闘いって新聞に出てたわよ。丈二も友二も格闘してんのよ。」

「判りました。お供します。」

そこで一句。

“孤介何堪従君意　東西南北喜相陪”　（田原）